

第3回教育・文化ふくい創造会議 議事録

□日時 平成19年9月28日(金) 13:30~16:00
□会場 福井県庁7階 特別会議室
□出席者 岩下委員、黒木委員、佐野委員、左巻委員、祖田委員、長谷委員、広部委員、吉岡委員(8名、五十音順)
西川知事
□事務局 伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹(学校教育)、山内教育政策課長、前川学校教育振興課長、中島高校教育課長、高橋義務教育課長

○開会

教育政策課長

お待たせいたしました。本日はお忙しい中、第3回目の「教育・文化ふくい創造会議」にお集まりいただきましてありがとうございます。

本日は、国立教育政策研究所の小松委員、前福井県中学校教育研究会会長の吹矢委員、スポーツプロデューサーの三屋委員の3人は、都合によりご欠席となっております。

それでは、早速でございますけれども、祖田座長に議事の進行をお願いしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○議事

祖田座長

皆さんには、いつも熱心にご議論いただきまして、ありがとうございます。今日も、よろしく願いをいたします。

それでは、早速、議事に入らせていただきますが、今回の会議の協議事項は、「教員の指導力向上策」、「理科・数学教育の充実」ということで、ご意見をいただきたい。もう既に2回にわたりましてご意見をいただいたところでございますが、そろそろ、次の機会には全体をとりまとめたというふうなご意向もございますので、できれば、もう少し立ち入った、具体的に、こういうふうな、今まで出していたいただきました中にも具体的な提案がたくさん含まれておりますけれども、主として趣旨とか意図というようなところが多かったように思いますので、できれば「こういうふうにと」、具体的にご提案いただければありがたいと思っております。

「資料1」が用意されておりますけれども、これをご覧いただきますと、「理科・数学教育の充実」という点につきまして、他の項目より、ややご意見をいただいているのが少ないように思われますので、まず、冒頭にこの問題につきまして50分ほどご意見をいただきたいと思っております。そして、少し順序が逆になりますけれども、引き続いて「教員の指導力向上策」について50分程度時間をいただきたい。そしてまた、これまで若干言及がございましたけれども、まだ討議を十分していない問題で、重要な問題であります不登校の問題がございますので、これに対する対応策ということで40分程度、ご議論いただければと思っております。こんなことで、次回には、事務局の方で、皆さんのご意見を集約いただいて。具体的な方向へとまとめたいただければと思っております。

まず、「理科・数学教育の充実」ということにつきまして、追加的なご意見をいただくというふうにさせていただきます。特に、ただ今申しましたように、教育行政としての対策や支援策の具体的なアイデア、「こういうふうな

したら」というアイデアがあればいただきたい。それから、「他の県ではこうしたふうにやっている」というふうなこともお教えいただけますと、具体的なアイデアの実現している形態ということになりますので、こういった点にご留意いただきまして、ご意見をいただければと思っております。

それでは、「資料1」の5ページ、6ページは、これまでのご意見をまとめていただいたものでございますけど、これを参考にさせていただきながら、ただ今の件につきまして、どなたからでもご発言いただければと思います。

黒木委員 県の方にちょっとお聞きしたいんですけど、5ページのところの「基礎・基本をしっかり習得させる教科指導法」の3番目のところ、いわゆる算数・理科の専門教員が担当する教科担任制は、福井県ではすでに実施されているんですか、それとも、可能な限りそうしているということですか。

加藤企画幹 あえて、教科担任制ができるようにということで配置をしている訳ではございません。ただ、それぞれの学校におきまして、まさに学校長の裁量によりまして、学級担任制というということで取り組んでいただいているところなど様々でございます。県の施策として、小学校5、6年を対象に教科担任制を取り入れているという訳ではございません。

黒木委員 そうすると、例えば一つの学校に、理科でも数学でも、免許を持った方を小学校にだいたいどれくらい配置するかというようなことは、ある程度計画的にされているんですか。

加藤企画幹 いえ、むしろ、理科や数学の免許を持っている教員は少ない方でございます。

黒木委員 少ない方ですか。そういうことであれば、やはり、もちろん担任するということが重要なんですけど、県として、本当に理科・数学を充実するということがあれば、免許を持った方がある程度、小学校に何人くらいとか、そういう形で配置なさる方がいいのではないかと。そういう計画をお立てになってやられる、まずそこから始めないとなかなか難しいと思いますが。

加藤企画幹 それで、こういうご意見もいただきましたので、もし、教科担任制を導入するとしたら、どれくらいの理科の教員が要るかということで、今、試算をしているところでございます。

長谷委員 「理科を好きになってもらうために」ということで、5教科指導というのは頼りないと、前回、環境教育という話もしましたけれども、小学校1、2年は生活科ということで社会と理科が合体して教科がある訳ですね。やはり実態を見ると、国語・数学を一生懸命やって、生活科はやや楽になると言うか、教科制が弱まっていますから、1、2年生の生活科の中での理科という意識付けをより強くしていくということが大事かなと。体験のための体験になっているくらいがありますよね。

それから、「総合的な学習の時間」の話も出ましたけれども、今のところ週3回で、年105時間ですね。次は週2時間くらいに落ちてきて、学校によっては英語活動をやっているところもあるんですが、やはり環境教育や理科教育のようなものを、県として一つ作ってやって、生活科の場合でもモデルとして取り組ますと、もっと理科を好きになるという方策は組めるように思

います。

と言うのは、「総合的な学習の時間」は、週2時間（年70時間）は残る訳ですから、そのうちの30時間なりを「福井県は皆、環境ならば、身近な自然とかエネルギーに関する問題に取り組む」とやれば、相当いろんなパターンで、きっちりしたやり方ができてくる。そうすると、「総合的な学習の時間」の学校間によるデコボコが消えて、より効果を上げていく、理科を好きにしていけることができると思います。

岩下委員

他の県の事例を見ていまして、やはり私立の学校、あるいは国立の附属のような学校だったら、理科の先生というのを比較的ちゃんと置いている事例は幾つかあるんですが、やはり公立の場合は、そういう形で置いている県は少のうございます。しかし、せっかくこういう形で先進的な取り組みをされていこうとしているのであれば、試算の結果との相談にもなろうかと思うんですが、抜本的に、理科なら理科、数学なら数学の免許を持っている先生をきちっと配置、一校に何人というのがいいのか、エリアでどのくらいという形がいいのかというのは少し相談の余地はあると思うんですが、そういう形でいく方がよいのではないかと思います。

どうしても今の学校の実態では、実験助手の方を入れるというような形で、「今のケアを、何とか負担を下げましょう」と言う話になりがちかもしれないですけど、本当は、今のことというよりは、「先のことを意識して、予算でどちらを取りますか」という話にたぶんなってくるのではないかと思います時に、体系的に教えられる枠組みを作るという方向を考えた方がいいと、先般からの議論を聞いていて私自身は感じました。

吉岡委員

理科の実験助手というような話の中で、理科の補助制度というんですか、補助教員は、具体的にこれから先どういうふうな形で進められていくんでしょうか。

実際にどれくらいのそういった先生を採用されていくのか。もし、そういった方がいなければ、いわゆる産業界の技術者であるとか、あまり教え方とかいうのは上手じゃないかもしれないんですが、「ものづくり」の楽しさだとか、そういったことを伝えることはできるのではないかと思いますので、「総合的な学習の時間」の中などで発揮していったらいいのではないかと、そんな気がしました。その辺はどうでしょう。

加藤企画幹

おかげ様で、今年の「わくわく理科授業応援事業」には、たくさんの応募がございまして、面接をさせていただきました。中でも、理科実験の支援員として高い資質・能力を持っていらっしゃる方を選抜させていただいたところです。10月1日から教育研究所において研修を始めまして、研修が終わりましたら学校に行ってください、先生方のサポートに当たっていただくという段取りになっております。

今年は支援員が30校程度、その他、特別講師の方にも来ていただきながら、全体で50校程度の学校に支援員の配置を行っていく予定でございます。また、国の方ではさらに予算を増やして、こういう事業を拡大していくというようにも聞いておりますので、まだ、どうなるかは分かりませんが、国の状況等も見ながら、県も対応していくということになると思っております。

吉岡委員

その方たちというのは、将来的にはやはり、教員に代わっていくような形

になりますかね。

加藤企画幹 その方たちは、大学で理科を専攻されている学生さんであるとか、一般の方であるとか、退職された方であるとか、様々でございます。

吉岡委員 その後の進路というのは、その方本人の選択ということですね。

加藤企画幹 退職された方は「時間的に余裕があるので、お手伝いに行ってください」ということです。

吉岡委員 学生さんですと、次に教員の道ってということも考えていくと。

加藤企画幹 教員もそうですが、工学部の学生さんもいらっしゃいますので。大学3年生、4年生くらいになりますと、1日授業がきっちり詰まっている訳ではございませんので、例えば「空いている時を利用して、近くの学校に行けるよ」という方が応募をしてくださっています。

黒木議員 今の話は、「理科の支援員」という話ですか。

加藤企画幹 そうです。

黒木議員 先ほど教科担任制という話をしたんだけど、数学はなかなか、理科と違って非常に難しく、理科だったら実験をやらせたりすれば、ある程度興味・関心も湧いてくるんだけど、数学はそうはいかない。数学博物館の話もそういう意味で言っているんだけど。

やはり人、数学を教えるような人を確保していくというのが非常に重要だと思うんで、基本的にはちゃんとした数学の免許の人をたくさん入れていくことが必要だと思うんだけど、短期的に、もしやられるのであれば、「理科支援員」みたいなもので、今度は数学をちゃんと教えられるような人もそういう形で募集して行って、入れていくような方法も考えられたらどうかと思います。やはりマンパワーがないと、数学はどうしても、実験道具でやらせるという訳にはいかないもんだから、非常に難しいんですね。

いつも「理数、理数」と言っていますが、実際は数学がなかなかね。現実問題は非常に難しいところがございます。やはり数学は、丁寧に対応する時間と人じゃないかなと思っている部分の一つあるんですね。それと、あと、教師の教え方にももちろんよりますけどね。その辺をある程度やっていった方がいいんじゃないかという気がします。

左巻委員 千葉県の場合ですけれども、小学校の先生の理科の実験技能がちょっと弱くて、安全の問題だとか、自分の技能が弱いという面とか、知識の面で弱いつという面とかで、実験に踏み出せない部分がたくさんあるんですね。

それを、例えば教育研究所とか、市町村教育委員会の指導主事が指導するっていうのもあるんですけども、千葉県の場合は割と大きくて、今、都会は新任の先生がどんどん増えていますので、高校の理科の先生に小学校の先生を指導してもらってという体制をある程度作ったらいいですよ。

もちろん、高校の先生全員じゃないんだけど、地域ごとに核になるような、高校の授業の中でもある程度実験もやって、生徒に理科を好きにさせようと思っているような教師に、さらに小学校の先生に対する指導を、ある程度少

人数でやってもらう。そういうのを市町村レベルか、ブロックか何かでやっているんですね。

僕が話を聞いていていいなと思ったのは、その高校の先生にとっても、すごく刺激になることなんじゃないかなということです。いつもの生徒で、大学受験の勉強というだけじゃなくて、「一番もとになる小学校の理科教育を自分が充実させる一人になっているんだ」という参加意欲と言うか、関わり方が強くなって、そういうのは指導主事に任せるよりは、そういう現場の、ちょっとやる気のある先生方を組織してやるというのも、考えた方がいいんじゃないかと。それは、高校の先生のために。

長谷委員

これは、理科と数学だけの問題じゃないでしょうね。だって、今、「総合的な学習の時間」で英語活動やっているところも、一生懸命やっているところとやっていないところがあると聞くと、やっていないところは、やはり英語を担当できる教員がいないというのが理由ですから。英語活動一つを見ても、音楽にでも何にでも、やっぱり専門性を持った教員がいるほど、そこはその分興味を持ってやっているということです。

もう一つ、小学校は学級担任制という、教科全部を持っている良さがありますから。その全人的な指導に基づく学級担任制を維持しながら、専門教員の力量をどうやってそれぞれに応援する形で高められるかという観点で論じないといけないと思います。

理科なら理科だけの先生を入れなさい、英語ならばまた英語の専門家を入れていこうということになると、教科毎の主張ではどうにもならない。小学校はやはり学級担任制で成り立つ訳ですから、その中でどうやって各担任が専門性を高めるか。今、高校の先生から支援を受けるように、一般の実験の支援員にしても数学にしても、どういう形が、担任制を維持しながら専門性を高めるかというのが、論点ではないかという気はします。

左巻委員

今、科学技術振興機構（JST）という組織が、文科省の下部組織みたいなものですが、理科教育の支援だけで年間100億円程度を使っているんですよ。科学未来館なども運営しているので、それだけの予算があるんですが、理科支援員もそこが予算を出す係になっているんです。

そのJSTが、「理科教育支援センター」というのを、10月に立ち上げるんですけど、僕はその準備委員をさせられていて、そこでいろんな話を聞きます。例えば、今の小学校の理科教育を充実させると言った時に、二つの論点が出るんですよ。一つが「担任の先生はやはり重要なんだよ」と。「担任の先生こそ子どもを一番知っていて、その先生が理科教育を充実させないとどうしようもないんだよ」。一方で、大学の理科系の学会の先生も代表で来ているんですけど、その人たちは「教科担任制にすれば良くなる、良くなる」と言うんですよ。だけど、現場出身の人で、今、副校長とかやっている人も来て話をすると、やはり「担任の先生の力を上げて『理科の授業ってこんなに面白いんだぞ』って。クラスもそれでまとまるという面もあるんですよ、いろんな教科の活動で。

だから、僕はそれを聞いていて、今までどうも「教科担任制にすれば、今よりもずっと良くなる」というふうに簡単に思っちゃうけれども、もしかしたら違うかもしれないなと思ったんですよ。だから、そういう点では「担任の先生をどう理科に目覚めさせるか」と言うか、やり始めて面白さに気付くと。

今、小学校の主要教科は、国語と算数ですよ。理科は最後の方なんです

よ。そうすると、担任の先生に「次にもう一人専科の先生を置くとしたら何の教科がいい」と希望を聞くと、「理科、理科」と言うんですよ。でも、本当は、もしかすると、それだと良くないかもしれないなと思う面もありますね。

それからもう一つ言っておくと、僕、東京大学で8年間、京都大学で4年間、中・高の理科の免許を取ろうという、実際にはあまり教員にはならないんですけど、取ろうという学生を毎年かなりの人数教えていたんですよ。そして、彼らに「いつ、理科系とかに進む、そういう理科の面白さを知りましたか」と聞くと、小学校、中学校時代なんですよ。高校の授業はつまらなくても、もう自分が理科系に進もうとしているから、やるんですよ。高校で影響を受けたというよりは、小学校、中学校で影響を受けているんですよ。だから、小学校、中学校の理科教育を充実させるというのは、後ろまでかなりつながっていくなという感じもしています。

もう一つ言うと、理科の専科の先生を置いている学校の問題もあるんですよ。つまり、専門じゃなくても、教務主任とかがあるじゃないですか、校務分掌であまり授業の時間を持たせられないという。そういう人に理科を持ってもらって、逆に、いい加減になる場合もあるんですよ。本当に理科の専門の先生が専科をやって、本当にやってくれるというだけじゃないという現実もあるんで、専科がいいかどうかというのも、ちょっと問題があるというのをいつも感じています。

祖田座長

今おっしゃっていた、小・中学校で興味を持つ場面というのは、授業の中とか、あるいは他の地域との関係とか、どういう場面でしょうか。

左巻委員

それは両方あります。一つは、家庭の生活の中。やはり物理だとか化学などの学科に来た学生は、小学校時代に、昆虫を追いかけるのが好きだったという人が多いんですよ。図鑑を見ながら、植物とか動物を調べるという体験がある人が割と多かったですね。だから、生活の中で、というのがすごく大きいなという面はあるんですね。

それから、授業で僕が聞いたのは、「高等学校、中学校、小学校で、印象に残っている授業1時間、『こんな授業をやった』というのを覚えているのは、どんなものですか」と聞いたんですよ。

そうしたら、高校を覚えていない、一番時間的に近いのに。結局、「あの先生は厳しく、何か一杯黒板に書いて、問題も一生懸命やらせて」という雰囲気は覚えているんだけど、1時間の授業で何をやったという鮮烈な印象がないんですよ。それが、小学校とか中学校だと、覚えているんですよ、かなり。「こんな実験をした、こうだった」という。そういうことを覚えているような子が、そこで拘っていることがいろいろできたので、やはり理科系に進んでいる面があると思いましたね。

黒木委員

先ほど、教科担任制の話をしたんだけど、左巻さんと私がちょっと違うのは、私は今、教育地域科学部という、教員を育てるところにいるんですね。

私が教科担任制と言っているのは、ただ単に、例えば「理学部の数学を出たりして教員免許を持っている人がやれ」という意味ではなくて、教員養成学部での数学の免許を持っている人がやるべきだというのが私の考えです。と言うのは、小学生というのは、それなりに成長の発達途上にあって、子どもたちを教えるのは、かなりよく知っている人であるべきですよ。そうすると、専門学部だけを出た人ではなくて、やはり、教員養成学部の数学なり、

小学校の中で数学を中心に修めた人なりがやるということが必要なんじゃないかと思います。だから、私が主張している教科担任制というのは条件付きで、単に免許を持っている人がやればいいという意味ではなくて、そういう具合で申し立てています。

なぜそういうことを考えるようになったかというのは、文科省に「その道の達人」という事業がありまして、日本数学会から派遣されて、私も全国の小学校に教えに行っているんですね。来月も出雲に行くんですけど。前に十日町の小学校で三角形の面積の話をしている時に、「どの三角形が一番大きくなるか」という話の中で、女の子はね、小学校の公式に則って「底辺×高さの2分の1」という答えを出してくるんです。でも男の子はそうじゃなくて、「横に切って比べればいい」という言い方をしてくる訳ですね。それは何かかって言うと、「カバリエリの原理」という数学の非常に重要な概念、定理なんですよね。それをもっと遡れば、「アルキメデスの原理」まで遡るんですが、そうすると、結局、その時に子どもが言った意見をどう拾い上げていくかということがすごく重要だと思うんです。

その子の場合、そういう意見を言って、普通だったら「それは駄目だよ」という話になっていく訳ですね。そうではなくて、その時に、やはり「それがとても大切なことなんだよ」というふうにサポートできる。ある意味では、数学のある程度の中身をよく知っているということがすごく重要なんです。ですから、そういう中身をよく知っていて、子どもたちが言ったことをちゃんと伸ばしていける、そういう指導の仕方というのがやはり必要だと思うんです。

そういう意味で、数学、算数の先生方の力を伸ばすような方策をもちろん採ればいい訳だけど、それは、やはり算数にある程度専門的に勉強した人であれば分かるというところがあって、その辺を広くしていくと、もっとたくさん拾い上げられる。

後で、担任の先生がおっしゃっていたんだけど、今まで、その男の子はいつも自信がなかった、手を挙げて何か言われるって。私はそれを「君は凄いね、それは『アルキメデスの原理』だよ」と言ったら、すごく自信を持って、その後の授業はすごく発言するようになったんですね。だから、そういう意味で、そういうきっかけをどう作っていくかということが、今、必要とされている。それが算数を好きになるきっかけになる。

一つの例に過ぎないんですけど、そういう意味でちょっと言っています。共通するところはあると思うんですが。

左巻委員 僕は、教科担任が全然駄目だっという訳じゃなくて、両方にプラス・マイナスありますよという話をしたのです。

長谷委員 教科担任制は、福井県でも、僕が30過ぎの頃でしたかね、一時そういう意見が入ってきて、一部実施をしました。それで小浜市教育委員会でも音楽の先生を、小さい小学校ですが置いて、その先生が二日ずつ各学校を回るとか。現実に教科担任を置くと、小さい小学校では一つずつ持てない、中学校でも持てないのに。行政上、そうなるので挫折したという気持ちがあるんですけどね。その辺をクリアしていかないといけないと思います。理科なら理科の先生を置いた時にね。

黒木議員 教科担任をしなくても、その人がコアになって、例えば理科の研究会とか、算数の研究会とかをやって、今、左巻先生が言ったように、他の先生の力を

上げるという中心になってくれれば、それでもいいと思いますよね。

長谷委員

それから、左巻先生のおっしゃった「自然に即した環境教育」みたいな身近な小さな原体験、あれはやはりとても大事だと思います。僕は、発達段階に即した、県内統一の福井県の環境教育のテキストを作られたらいかがかという気持ちは持っているんですがね。いかがでしょうか。

左巻委員

今の観点ですけど、ある研究会で、小学校の先生が自分のクラスで実践指導している内容なんだけど、「野遊び名人になろう」という提起をするんですよ。

そこには、植物だとか昆虫だとか魚だとか、外で子どもたちが遊ぶ中で、こんなことができてクリアされると、名人。名人にならなくても一級とか何とかという感じのものをクリアしていくんですよ。それが、月ごとに「今月はこんな名人の技を身に付けよう」みたいなのがあって、それを、例えば「総合的な学習の時間」みたいなところで取り組んでいるんですね。

そういうのは、環境教育で何か抽象的、理念的な話よりは面白い。特に小学校では自然の中で、昔の子どもだったら当たり前に行っていたことを、今は、地方で、田舎なのにやっていないんですよ。だから、そういうのをもっと体験するのが、その後の知識の土台になりますよね。

佐野委員

前にも話をしたんですが、福井新聞社では、「科学アカデミー」という理科教育の研究を毎年やっています。これから秋から冬にかけて、県内7万5千人の小・中学生の中から、2万5千人が集まる訳です。だから、3分の1くらいの研究発表が集まる。そこで、子どもたちが、ものすごく面白い発想でいろんなことを研究して発表するんです。パワーポイントを使ってちゃんと指示して、発表する能力だけでなく、研究内容、伝達力、表現力も含めてすごいレベルなんですよね、トップクラスは。

十数年経って、その子どもたちがどうしているかというところ、それぞれの大学の教授、研究者になっていたり、いろいろな分野で活躍しているということで、つながっている訳です。でも大半の人は、子ども時代に興味・関心を持って理科が「好き」なのが、いつの間にか消えていってしまうという印象があり、これはなぜだろうと思っています。

いわゆる基礎学力の向上が、理科的発想なり理科的思考なりにつながっていないのか。その辺を体系化して、専門分野につながっていくような方策はないかということが、一番思うところです。

例えば、今、野遊びのお話が出ましたけれども、刈取り直前の田んぼをグルッと廻って歩くんですね。すると、稲が所々ぼこぼこ倒れているところがあるんですよ。それで、ぼんやり見て風のせいかなと。お百姓さんなら知っていると思うんですよ。あれは一体何だろうと。

子どもがいたので、聞いてみたんですね。するといろんな答えがあって、人間の足跡だというファンタジックな答えだとか、あれはあそこで誰か暴れたんじゃないかとか、子どもたちからはそういう答えがあったんです。分からないので聞いたら、あそこは肥料をたくさんやりすぎて倒れたと。それと、もうひとつは、水はけがあの部分だけ悪かったんだと。それで根が腐って、水管理の失敗だと。そういう話がやはり聞けば出てくる訳ですね。

そういう日常の中で疑問に思うことを子どもたちは持っていると思うんですよ。それを引き出してやれば、で理科とか数学とかの学問、勉強の分野でそういう考え方をさらに伸ばしていけば、かなり面白くなってくるんじゃない

ないかと思えます。

今のお話では、日常の授業や教室の中で、教科担任とか担任の先生がそういう視点で子どもたちを誘導する力を持っていくことができるように、制度的にも条件的にも保証できないかどうか。教員の数を増やすことはまたそれでたいへんで、いろんな矛盾もあるでしょうから、やはりまず、現場の担任の先生、それからそれを補助する支援の先生の体制の組み方ですね。

「福井県の理科研究部会の先生はすごい」と僕は思っているんです。あれだけの指導をして、子どもたちの研究発表まで導くというのは、やはりたいしたものだと思っています。果たして、福井の理科のレベルが下がっているということですが、私から見ると、かなりレベルが高いと思っています。この「科学アカデミー」は全国どこもやっていませんので、比較はちょっとできないですが、僕はそういう印象を持っています。

黒木委員

今、おっしゃったことで言うと、多分、興味・関心というだけでは走れないんです。理科も数学も同じなんですけれど、興味・関心をもうひとつ乗り越えなきゃいけない部分があるんですね。それを乗り越えられるだけの、まあ、学力という言い方はいけないのかもしれないけれど、力があるかどうかというのがものすごく重要な部分があって、体系化するというこの中の大切さみたいなものがある。

やはり数学だったら、計算したり、問題を解いたりするのが好きだということだけでは、高校まではつながるんだけど、大学では落ちこぼれちゃう訳ですね。ほとんど落ちこぼれちゃう。つまり、そこにある数学的なつながりと、数学的な、私どもは「思想性」と言っていますが、精神学を分かっていると。それが分かるためには、ある程度、非常に抽象的な考えが必要になってくる訳ですね。そのところが鍛えられないと、乗り越えられないんですよね。

例えば、化学でも何でもそうだと思うんですが、やはり実験し、レポートを書き、報告をし、その中の現象をきちっと見つけて分析する力が身につけていないと非常に難しいということがあって、そのコアのところ、興味・関心プラスしたコアのところを中学校や高校で身に付けていくということが本当の学力ではないかと思えます。

祖田座長

今おっしゃったのは、基礎学力的な意味でということですか。

黒木委員

ええ。それが必要なんじゃないかなという気がして。

佐野委員

だから、その辺の道筋をどう教え込んでいくかということが大事なんですよ。

黒木委員

そうですね。そこをどういう風に作っていくかということが重要なんじゃないかという気がしてしまして。

佐野委員

そこを教える先生は、優れた指導性とか専門性が求められる訳ですね。そういう先生方をどう確保していくかということですね。

祖田座長

専門の方を投入するような話が出てまいりましたが、先ほどから聞いておられますと、結構現場では工夫をして、理科に興味を持たせるような教育に努力しておられるというのが分かります。これでいいということにはならない

とは思いますが。

もうひとつは、やはり今の子どもたちは、家に帰ったらゲームをしたりしてしまうということで、今回の論点の中に地域社会は、どういうふう子どもたちを自然と結び付けていくかということも挙がっている訳でございます、その辺のことはどうかということと、それから私、日経新聞で、1週間ほど前でしたか、小学校、中学校の頃は結構理科に興味を持っていると。ところが、社会では、ものづくりに対する意欲といいますか、特に高校生が受験する場合に、かつて私どもが若い頃は、工学というのは花形だったんですが、今は工学志望の方が非常に少ない、ある意味ではレベルが下がっているということがある。その理由は何かということ、そこに従事することの意義というか、そういうことがしっかり社会で評価されていない、あるいは、待遇の面から見ても、そういうことに打ち込む人に対する待遇があまりよくないんじゃないかという。つまり、高度成長が終わって、ものづくりに対する意欲といいますか、そういうものに対する考え方の問題があるんじゃないかということも挙げておまして、やはり社会の受け止め方、科学・技術、そういったものに対する社会の評価の仕方、扱い方、こんなことも大いに関係しているんじゃないか、このところはここで議論してもちょっと適当でないと思えますけれども、そんなことも感じております。

先ほど言いましたように、地域社会と学校との関係という視点からも、自然の体験、体験することは非常に重要だというご指摘もたくさんこれまで出しました。

それでは、一応ここで、一通りご意見も出たようでございますので、「理科・数学教育の充実」につきましては、ここで一応おきたいと思えます。

それでは、次の協議事項でございます「教員の指導力向上策」ということで、追加的なご意見を頂戴したいと思えます。これにつきましても、先程来申しておりますように、行政的に具体的にどういう施策を講じるか、どういったアイデアがあるか、あるいは他の県で先進的な取組事例はないかと、こういったような点を含めてご意見を頂戴したいと思えます。

「資料1」の1ページから4ページを参考にいただきまして、どなたからでも結構ですので、ご発言いただきたいと思えます。よろしく願います。

長谷委員

2ページですね、「これからの教員に求められる資質・指導力、教員の評価・顕彰」のところに、「部活動」中心から「授業」中心へと出ているんですが、これは教員に求められる資質としては当然のことですけれども、現実には、中学校や高校の運動部活動というのは、福井県の場合なんかは特にそうですけど、競技力向上の基礎を担っているんですね。ですから、こういうふうにと書くと、一方では、どこかに社会体育に移行するか何らかの方策がないと、苦しくなるんじゃないかと思えます。

一方的にこれでやると、授業中心にいかなければならないことは当然ですが、「部活動はいらんよ」という言い方に伝わってしまうと、受け皿がない状態ですから、競技力の向上という面、あるいは生涯スポーツという観点からいくと、アメリカのようにスポーツクラブがあって学校帰りにやれる体制があれば別ですが、どのようにこれらを整理しておくかといくことがないと、このまま言いつ放しだと、ちょっと問題をはらんでいるような気がします。

祖田座長

ただいまおっしゃっていただいた点については、最初の「総合的な学力」ですか、これについては人間力も含めた学力という趣旨で、この言葉が出て

いるようですので、やはり部活も重要な面があると考えられますので、この辺、やはり今おっしゃったように、注意深い表現が必要じゃないかなと思います。

左巻委員 「部活動中心から」というのをとればいいですよ。

祖田座長 部活も大切だが、授業が中心であるという言い方でないと、こちらからこちらへという感じになるので、ちょっと注意が必要かなと思います。

左巻委員 結局、今、東京都もそうですけれど、教員評価というのをいろいろな形でやり始めていますよね。その時に、評価の観点がずれると、現場の教員がやる気をなくすんですよ。

結局、管理職が評価することになりますよね。その管理職の評価の目というか、それが結局は管理職にとって使いやすい形の無難な方がいいとか、あるいはずっと遅くまで残ってやってくれる人とか、土日も来て部活もどンドンやってくれる人がいいとかというふうになると、結局そういう評価軸になれば、そういうふうに行っている人にとってはいいのかもしれないけれど、授業で子どもたちをちゃんと育てようと思う人が、やる気を失う場合がありますよね。

今後、福井県でも教員評価が入ってくると思うので、その時に現場の教員がやる気を起こすような形のシステムをつくらないとまずいですね、それを初めから気を付けておいた方がいいですね、というふうに考えています。

黒木議員 先ほど、長谷先生がおっしゃった「部活動の役割を地域に移行する」ということについて、地域にはそれなりの受け皿はあるのでしょうか。

長谷委員 正直言って、野球とかサッカーとかのスポーツ少年団など、学校でない形でやられかけつつある種目もあるが、それが学校であまり好ましい姿ではない部分もあって、というのは、授業が済んだら帰ってしまっ、学校で演劇クラブをしていて、帰ったら野球やっているとかね。

左巻委員 結局、部活動は非行とかを防止するものにもなっていますよね。余分なことをしない、もちろん体育だとかあるいは集団の中での育ちとかいうのもありますけども、日本の場合には、どうも学校が主導して、部活で囲っていくというのが主流になっている面はありますね。

だからこの前話に出たフィンランドとかは、学校の先生は4時頃にみんな帰っちゃう訳ですよ。で、4時から自分の生活が、学校の教員としての生活でない生活が次にある訳です。それだけの余裕があって次の日に生き活きと教えられる訳です。だから、ちょっとそういう点で、日本の場合は割りと学校に拘束されている時間が長いかなと感じます。また、長い方がいいという見方をしている人たちも多いので、その辺をどう変えるとかが問題かと思えます。

黒木委員 地域と学校との棲み分けし、どういうふうにして協力していくかという全体像をつくらないと、今すぐにはできないでしょうが。例えば、部活みたいなものは地域でやるというようなものをつくれていけば、学校の先生はそれだけ休まるというものもありますから、これから多分、地域でそういう人たちに指導して、育てていかなければいけないだろうと思います。

今のスポーツ少年団の問題は、それを指導している人をどう指導していくかという問題が一方である訳です。私も、少年ソフトボールの監督を15年くらい地域の小学校の校区でやっていたのですが、そうすると自分がやっていた経験だけでどんどんスパルタをやってしまう。そうすると子どもたちが伸びない。一時的には強くはなるが、スポーツをやるのが嫌いになっていく。地域に任そうとするならば、指導者をどういうふうにつくっていくかということも考えていかないといけない。それで学校の先生の役割を減じていくというような構造をつくっていかねばならないと思う。

今、ここでは無理ですが、徐々にそういう構造を地域の中につくっていくことが必要かと思う。私も専門家ではないのでよく分かりませんが、イギリスのパブリック・スクールなんかでは、例えば部活なんかですと昼休みになる訳です。午前中授業があって、お昼ごはんを食べてその後が趣味の時間なんです。そこでクリケットをやったり、焼き物をやったり、バイオリンを弾いたり、絵を描いたり、昼休みの1時間か2時間でやる訳です。それが終わったら、また授業に戻って夕方に終わる。もっと続けなければ地域に帰ってやると。そうすると、自分の趣味を高めていくという、そういう意味での人間教育につながっていく訳ですよ。そういうやり方をどうつくっていくか、地域を含めて構造化していく必要があるんじゃないかという気がします。

将来的には、そういう構図を描きながらやっていかないと、学校教育は変わっていかないと感じます。

佐野委員

今のお話ですが、地域スポーツを軸にしていろいろな指導者を育ててやっていくというのは、構造としてこれからそういう方向でやっていかなければいけないんだと思う。

私は、町内会長をしているんですが、町村合併で役場の人は減りましたし、地域サービスがやはり低下しています。そうすると、それを町内会で引き受けるんですね。公園なんかですと、草刈は昔からやっていた訳ですが、樹木の剪定なんかですと、保険を掛けたり、チェーンソーや草刈機を使ったり、簡単に言うけどなかなかできない。そうすると、ある町内では草ボウボウになっているし、ある町内は樹木の上まできれいに剪定してある。見て回るといろいろある。昔はそんなことはなかったと思うんです。

また、「子ども見守り隊」を町内でつくっているんですが、声は掛けているものの見ているだけです。公園に連れてきて「子ども遊び隊」くらいにして、親と交流するような時間があればいいんですけど、時間的余裕もない。地域自身も高齢化して、高齢者も時間があるかということ、ないんです。みんな働いているんです。だから、結局、地域の教育力っていうのが低下してしまっている。地域の子どもの数より犬の数の方が多いとか、極端に言えば、世代が変わって、遠くの子どものより身近な犬の方がよいか、そんな雰囲気もある。地域の受け皿というのは、簡単に言うけれどかなり難しいのではないかと思います。

黒木委員

やはり、地域に教員の肩代わりをしてくれる人が必要ですね。

佐野委員

それが地域の教育力にもつながっていくと思います。

吉岡委員

地域に受け皿を求めるのが難しいと思うのは、高校とか中学ですと部活のレベルも上がってきて全国大会に参加するとかになると、地域の人にそこまで求めるのかということ、後が続かないような気がする。

だから、あくまでもサポート役に徹するかどうかということだと思います。地域で町内のことを維持するのもなかなかたいへんな状況である。子どものいないところでお祭をやっているという雰囲気になっているのが現状かなと思います。

祖田座長 団塊の世代とか、もちろん就職される方はたくさんおられますけど、たくさんの方が退職されて、社会のために尽くしたいと思われる方も結構たくさんいると思われるのですが。また、NPO法人なんかをつくって子どもの世話をしたりとか、自然や農業と子どもを結びつける事業をやりたいとか、結構そういうのもたくさん生まれているような気はするんですけど。そういうものをどういうふうにコーディネートしていくかということが、今、大事なのではないのでしょうか。確かに地域の教育力全体が低下しているというのは間違いないのかもしれませんが。

吉岡委員 理科と数学の話に戻ってしまうかもしれませんが、小学校の時にビオトープを作ったんですね。そういう目的の時には地域の土木業者などが来てくれたり、石を運ぶのを近くの人が手伝ってくれたり、そういう記憶があります。だから、そういう具体的な、一時的に力を貸してくれとか、そういった形で地域の人と協働するというのは可能かと思います。

祖田座長 福井の地域の力は、私はそんなに落ちていないような気がする。相対的に福井は地域力が強いんじゃないかと思う。

広部委員 話が地域の教育力に戻っていますけども、今、行政の方では、国も都道府県も含めて、子どもたちの放課後の受け皿をいかにしたらよいかということ、制度上進めております。今、マスコミ等でも出ておりますが、「放課後子どもクラブ」は、夫婦が共働きで放課後いないといった子どもの受け皿、更に少年野球とかの少年団に何も入っていない子どもたちが行くところがないとか、そういう子どもたちがどこへ行くかということで、「放課後子どもクラブ」という受け皿づくりも施策の一つとしてやっております。

皆さんがおっしゃったことも、そういったことともリンクしてくるという思いはします。ただ、吉岡委員も長谷委員も言われたように、地域によって、市街地と田舎とはやはり違う訳です。それをこれからいろいろと考えていく必要があると思っています。

ただ、福井県は、地域力がまだまだある方です。

吉岡委員 それから、小学校区で「よさこい」をやるというので、子どもたちに何曜日か都合いいか聞いたところ、みんな毎日都合が悪くて、塾とか習い事に行っているんですね。そういった中でも、(福井市の)宝永地区では「子どもリーダーズクラブ」という、子どもたちの受け皿みたいな形の活動はやっております。

祖田座長 今、地域力の方に話が行っておりますが、教員の指導力向上策について、さらにご意見はありますか。教員の指導力と地域の指導力がうまくセットされるといいなということかと思いますが。

左巻委員 以前も「同僚性」という言葉が重要視されているという話をしたんですけど、各学校の校内研修が、教師にとっても楽しく、やりがいがあり自分の

ためになるような形でどういうふうにできるようになるか。例えば、県の教育委員会なり市町村の教育委員会なりが、各学校に「こういう校内研修のやり方があるんだよ」といった指導ができるかどうかといったことが、重要となっていくような感じがします。

前も言ったと思いますが、教員って年齢が経つといろいろ経験はするが、反面ある意味でずるくなる面もあるんですね。いろんなものに手を抜いてくるんですよ。手を抜いてもできるようになってくる面もあるので、もっと新しい刺激を受け止めて、もっと子どもたちと一緒に教育に頑張ろうっていう形になるような研修体制が重要だと思う。

普通は、教育委員会の指導課訪問みたいな特別な日だけ公開授業をすることになりがちなので、それが当たり前前に学年で自分たちの学年の子どもたちをどう育てるかという意識の下、子どもたちを本当の学びにつながるような研修をできるかどうか、それが一番重要な気がします。

黒木委員 今、なぜ学校が忙しくなっているかということをもう少し分析をきちっとやった上で、今、左巻先生がおっしゃったような体制をつくっていかないと、今すぐは困難だろうと思う。

祖田座長 先生方の忙しさというのは、国際的に見るとどうなんでしょうか。

左巻委員 日本は、特に忙しいんじゃないですかね。

祖田座長 それだけ、先生を忙しくして、なおかつ成果が出ないとなると、抜本的に考えなきゃいけないのかなとは思いますが。

吉岡委員 授業時間数が減っているのに、なぜ忙しくなっているのかが不思議です。

長谷委員 同じ仕事量でも、能力が高ければそんなに忙しさも感じないでしょうし。だから、それだけではないと思うが、忙しくなったというのは能力が落ちたのかもしれない。

左巻委員 今は、説明責任が問われている時代で、例えば、私も長い間、現場で教員をやっていたが、僕がいた頃は、ある意味で適当だったんですよ。適当でも何とかなったんですね。

まだ現場にいる友人とかに話を聞くと、「きっと左巻さんがやっていたことを今やったら通用しないよ」と言われます。要するに、成績一つつけるのにも、細かい分析をして、「こうだから、こういう成績になりました」というふうに説明できなくてはいけない。僕らの時代には、中間テストとか期末テストとかを機械的に合算して「5」とか「4」とかつけていたんですが、それが今はもっと細かいことまでいろいろやって、「こうだからこうである」という説明をするための資料をかなり用意しておかないといけなかったり、いろんな報告書を管理職に出して、管理職は教育委員会に出すという、その報告書もかなり増えているらしいんですよ。そうすると、そういうものの作業に追われていくようになる。

きっと、子どもに手が掛かるから、子どものせいで忙しくなっているのではなくて、もっと違う、管理職とか教育委員会とかが、もう少しなんとかなれば軽減される問題で忙しくなっているような気がします。

吉岡委員 書類を作るよりも、子どもの方を見てほしいというのが親の気持ちでしょうね。

左巻委員 3 2 年前に、僕は中学校の教員になったんですけど、恥ずかしい話になりますが、その頃、放課後になると机を全部後ろに下げて、クラスの子もたち全員とレスリングをやっていました。女子は見ていただけですけど、男の子相手に投げ飛ばして、最後には僕が覆いかぶさられて負けるんですけど、それを毎日やっていました。

あるいは、理科室で一緒に実験をする。そういうふうにと余裕があったし、昔だったら、小学校だったら掛け算ができないとか何とかができないとかだったら、何人かは残して付き合ったじゃないですか、先生が。今は、その余裕はないと思います。そうすると「あなたのお子さんはこういうところがダメだから、家庭で何とかしてください」とか、結局、家庭に投げた。特にそういう家庭は教育力がないから、そういうふうになっていくのであって、ダメになったまま格差が広がっていくという面がある。

佐野委員 それだけ、いろんな問題が複雑になってきているんだと思うんですね。一つの問題を解決するのに降りかかってくる問題が多すぎる、問題解決にもものすごく時間がかかると思う。結構忙しい。

忙しいというのは、余談になるが、白川静先生のお話を聴いていたら、忙しいのは「心を亡ぼす」と書く、慌しいのは「心が荒れる」と書く、忙しくて慌しくなると、物忘れすると。それも「心を亡ぼす」と書くと、忙しくて慌しくて物忘れしたら、今度は記憶が失われることになるので、人格の崩壊につながっていくということになると思うんですね。

だから、そういう意味で、忙しいという言葉はあまり使いたくないんで、「ご多用」とか、「お忙しいところ」と言われるよりも「ご多用中」と言われるほうが仕事しているのかなという気がする。そういうふうにして、忙しさの原因というのが、問題の複雑さが一杯出てきているということなのではないかと思うので、そこのところに捉われていると、自分が荒廃していくことにつながっていくのではないかと、私は感じます。

長谷委員 教員の資質というのは、子どもを指導する能力というのが当然求められますけれど、親と良い関係を築く、信頼関係を築く能力というのも資質の大きな要素になってきていると思う。

良い方に回れば、ものすごく良い方に回っていくし、一つ引っかかってしまうと一年引っ張られてしまいます、その子の親に。やはり親との関係がどう結べるかどうかじゃないでしょうか。だから、今まで子どもをどう教えるかについて議論してきましたけど、それを資質の一つとして、どう培うかということもやはり資質向上に加えないといけないと思います。

祖田座長 忙しさの方に話がいきましたけど、本当に忙しいことが教育の質の向上につながればよいと思うんですけど。今の話は、ちょっとつながらない面があるんじゃないかと思います。

私なんかは、小・中学校の状況はあまり分かりませんが、忙しさの要因は何かということをしつかりと分析していただくようなことが必要じゃないか、そして省けるものは最大限省いて、教える方に力を投入していくというふうなことが、今、必要じゃないのかなと、今、皆様の議論を聞きながら思いましたが、そういう調査しているのは、今ないとしたら今後やれるのかど

うか、その辺りはどうぞございましょうか。

広部委員 教員の多忙化解消策ということにつきましては、この次の議題に考えているので、その議論までに座長がおっしゃったようなことは、私どもの方でもきちんと資料としてお出しできるよう、整理をしていきたいと思っております。

祖田座長 まだこの項目についての時間がございますので、教員の指導力向上の具体的な、こういうふうにしたらいんじゃないかという、あるいは研修の内容や必要性などにつきまして、ご意見がありますでしょうか。

黒木委員 教員のOBが、どういう人たちがいるのかということは、県で把握しておられるのでしょうか。どういう科目の先生がいるかとか。

加藤企画幹 ずっと以前まではということではないですが、そういうデータは、持っております。

黒木委員 そういのを、例えば何かチームを組んで、数学の研修プログラムを作るというのは可能ですかね。実際にその先生がいろいろ知恵を出して、やるというようなことも可能ですかね。

加藤企画幹 お願いしてみないと、なんとも言えません。

左巻委員 ただ、退職しちゃうとそういう意欲をなくしてしまう方も多いでしょうね。こういう研修会の講師に来てもらう人はアクティブに動いている人、現在も関わっているような人じゃないと、話が通じませんよね。

黒木委員 だからそういう人をある程度組織化していくということが必要なんじゃないかなと思うんですね。

左巻委員 今日、私がメールのやり取りをした人は、青森県の人だけけれど、校長を退職して地域で科学クラブをやっている、「科学マジックショー」だとかいろんなことをやっている先生なんですけども、そういう人は理科支援員の制度ができたら応募したりしているんですよ。そういう、退職しても教育と関わってやっている人でないとダメですよ。

黒木委員 そういう人を把握して、リストアップしてできないですかね。

加藤企画幹 先ほどもお話しが出ました理科支援員ですけど、退職した理科の先生も応募いただいております。

黒木委員 是非、数学の方も把握していただきたいと思います。そして、それを活用するという言い方は失礼かもしれませんが、教員OBだけではダメだと思うので、大学の先生なりに一緒に入ってもらってチームを組んで、それを学校に。

教職大学院はまさにそういう形でやっているんですが、教職大学院の目の届かないところは、そういう形で学校単位でやる。そういうシステムをつくらしたらどうかという気がします。そのためには、どういう人的資源がいるの

かが必要になってくるんですが。

長谷委員 僕のところの「若狭ものづくり美学舎」は、退職教員15名。来年2人が予約しています。また、昨日2人参加しましたから、だいたい19人です。だいたい僕より若い、60から65歳くらいです。数学もいます。一生懸命やってくれています。

黒木委員 やはり地域ごとにつくっていくというのがよい。もったいないですよ、60歳で辞められて。

左巻委員 退職者だけでそういう組織をつくるよりは、現職の人も含めた組織をつくっておいて、その中で退職しても活躍できるようなシステムをつくるというのが一番良いですよ。

来年の2月に、群馬県に講演に行くことになっていて、小学校の先生とか中学校の先生とか、それは理科関係なんですけれど、地域の実験教室など学校以外で取り組んでいる人たちの集まりなんです。かなりの人数がいます。そこには、退職の先生も組織されていて、これから退職していく人も増えていく、仲間が増えてきたりするんですけれど。

そういう学校での授業だけでなく、地域でもそういう活動ができる余力を持っている先生方というのは僕はすごいなって思うんですよ。さっきの話ではないけれど、ものすごい多忙化の中でもそういうことをやっている訳だから、本当は、福井県だつてうまくすれば、学校でもやっているし、地域でやっていることが学校にフィードバックされていくような、そういううまく取組みができれば面白いなと思っています。

黒木委員 昔は、それこそ、学校の先生が一番の地域のリーダーだった訳ですから。そういうものを、組織化して、現職のときから組織化してもよいとは思いますが、その人たちを活用できるようにしていけば、ある程度安上がりというか、恒常的につながっていきますよね。何かやりますよとかそういうことじゃなく、自然に地域にできていくと地域力も上がるし、先生方の力も上がるし、理想かもしれないけど、そういうことかなと。

私が、数学博物館の話をしているのも、公民館かどこかに一箇所あって、そこに先生が集まってきて、子どもたちが来てくれれば、それで活性化していくのかな、そういう活用の仕方をしていく、そういう組織ができていくとかなり違ってくるかなと思います。

佐野委員 先生のOBで、地域で活躍しているのは5教科以外の先生が多いんです。音楽や美術など。是非、5教科でやってもらおうと思います。

長谷委員 僕らのところでも、英語はこの人、数学はこの人という中心人物がいてくれる訳ですよ。その人がいれば自然と集まってくるんですね。学校から依頼があればすぐ派遣できる。放課後に子どもを集めての学力向上もできる。

広部委員 長谷委員のところはNPO法人ですか。

長谷委員 いいえ。NPOをとれるだけの活動はしているんですけども。

祖田座長 地域の教育力というか、学校の邪魔をするようでは困ると思うんですけど、

学校を支え、地域でそれを教育力として組織化していくということが大事じゃないかということでした。

先ほどから出ていますとおり、言い方が悪いかもしれませんが、地域の人的資源といいますか、いろんな方面の方がおられますので、地域の人的資源というのを調べてみまして、それを活用、この言い方も適切かどうか分かりませんが、ご協力いただくと、喜んでしていただく方も結構いるのではないかと気がいたします

そういったように、地域と学校をうまくコーディネートして、地域の教育力を組織化するような考え方も福井方式というか、新しい福井のやり方としてもいいんじゃないか。私は福井へ来て4年になりますけれど、地域の力が落ちたとかいっていますけれど、私は、まだまだ他のところと比べれば、地域に対する想いとか、地域の力というのは相対的には福井県はまだまだ高いと思いますし、今出ましたような意見も何らかの形でお考えいただければ面白いかなという気がいたします。

長谷委員 退職教員が今15名ですけど、それが真ん中において、47名の推進協議会というのが地区の各集落から出てもらって、推進協議会で全体を運営していくというような形にしています。だから、推進協議会が運営母体になっています。

黒木委員 地域のことと、もう一つは教職大学院や教育研究所を使ったりして、新しい知恵も入れていくという二本立てでやっていけば、かなりうまく回っていくのではないかと感じます。

祖田座長 それでは、この件について一通り意見も出たような気がしますので、後でまた全体を通してご意見を伺うということで、次に移ろうかと思えます。

これまで若干議論が出ておりますが、不登校問題への対応について、ご議論いただきたいと思えます。

資料を見ておりますと、福井県は不登校の児童が全国より若干少ないという結果が出ているようですが、事務局の方からも若干のご説明をいただき、その後、ご議論いただきたいと存じます。

加藤企画幹 お手元の「資料2」をご覧くださいと存じます。「不登校問題に関する基礎資料」でございます。

文部科学省の定義によりますと、「不登校」というのは、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童・生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあること、とされております。ただし、病気や経済的な理由によるものを除くということで、統計の基準といたしましては、年度内に30日以上欠席した者を不登校児童・生徒として統計を取っている訳でございます。

表をご覧くださいと存じますが、本県の小学校では、平成18年度は160人の児童が不登校になっております。中学校では626人という状況でございます。

下のグラフをご覧くださいますと、学年別の不登校者数につきましては、小6から中1になりますと、ぐっと不登校の生徒が増えている状況にありますが、これは全国的な傾向でございます。

次に2ページをご覧くださいと存じます。不登校になった原因を調査した結果でございますが、全国そして本県ともに児童・生徒自身の「本人に

関わる問題」というのが一番高い原因となっております。その他、友人関係、親子関係をめぐる問題という結果が出ております。

そこで、県の教育委員会としての施策ですが、「不登校対策総合支援事業」ということで、小学校から中学校に上がる時に不登校が増えるということもありますので、校区内の小学校と地域とが連携して不登校を減らすため、「小中学校連携実践推進事業」を実施しております。また、悩みを持つ子どもの相談相手として、年齢差の小さい、若い大学生に相談相手になってもらう「心のパートナー派遣」を実施しております。さらに、24時間電話相談の広報など、不登校に関する啓発をメディアを通じて行う「メディア啓発事業」も実施しております。また、講演会やカウンセリング研修会を開催し、県民の皆様にも不登校に対する理解を深めていただいたり、保護者や一般の方を対象にカウンセリング機能を持った人材を育成しております。本県では、それぞれの市町および県に不登校の生徒が来られる「適応指導教室」がございまして、その教室同士の交流事業というのを実施しております。

2番目に、全ての中学校に臨床心理士等のスクールカウンセラーを配置する事業を実施しております。また、子どもと親の相談員等活用調査研究委託事業や、問題を抱える子ども等の自立支援事業などを施策として実施しております。下には、市町教育委員会の施策について記載しております。以上でございます。

祖田座長 ありがとうございます。それでは、どなたからでもご意見をお願いいたします。

私の方から、質問させていただきたいと思います。まず、中学校になるとどうして不登校が増えるのかということと、次に、今は学業不振が不登校の原因と言われていますが、統計資料を見ますと「学業の不振」というのが全国、福井県ともに1割以下で相対的に「本人に関わる問題」とか、「友人に関わる問題」とかよりも順位が低いようですが。

加藤企画幹 1番目の、中学校になるとどうして不登校が増えるのかということについては、あくまでも推測ですが、小学校の時には学級担任制だったのが中学校では教科担任制へとシステムが変わる。それだけでなく、授業の中身がぐっと盛りだくさんの内容を教えるようになる。さらに1日の授業時間数も増え、生徒会活動や委員会活動も盛んになり、部活動も始まる。また、友達を作るということも大切なのですが、小学校から中学校に生徒が集まってくるので友達ができないこともあるかもしれません。

つまり、小学校と中学校では学習環境が大きく変わるということで不登校が増えやすいのではないだろうかと考えられます。そこで、小学校と中学校の連携をより深めることで、不登校の生徒を減らすことができるのではないかと、ということで先ほどのような事業を実施している状況でございます。

それから、2番目のご質問ですが、「学業の不振」につきましては、まさしく本人に関わる問題であります。文部科学省の調査項目が全国共通でこのような分類になっているためでございます。

祖田座長 それではどなたからでもご発言お願いいたします。

吉岡委員 不登校問題というと、本人にとっても非常にナイーブな問題です。私も直接、不登校の子と話をしたことがあるのですが、学校へ行って、いじめられている訳ではないが、誰とも話せずに友達が作れない。小学校、中学校、高

校と上がっていく中で培われていく人間力を形成できなかったというのが一番の原因なのではないかと思えます。

授業の教え方だけではなく、学校の先生の指導力という問題もあると思いますが、先生の自分自身の体験談とか人生論を授業の合間、合間に語れるような、教員の資質向上というのも非常に重要になってくるのではないかと思います。

先ほど左巻先生がおっしゃっていたように、授業が終わってから子どもとレスリングで肌と肌を触れあうというのはスキンシップをとりながら人間関係を築いていくという意味で、最高ではないかと思えます。

最近、小学校、中学校、高校とそういったスキンシップができていなくて大学に入り、大学ではなんとなく人との関係も気にせずに、一応、毎日授業だけ行って引きこもると、「準引きこもり」などと言われる人が増えてきているという話もあります。

そういうことで、先生が子どもをもっともっと見てあげることが重要だと思います。もちろん、保護者も子どもにもっと関心を持たなければいけないし、なぜ不登校になったかという原因を、保護者と学校と3者で真剣に聞き出せるような時間を作ってあげることが重要だと思います。

岩下委員

子どもが不登校になってしまった親に対するケアというか、相談できる環境を作ってあげたいと思えます。

不登校を引き起こす原因を作ってしまうクラスメイトがはっきりしているケースもいくつかあって、その場合には、その原因となっている子ども自身も不登校にならないようにケアを心掛けながら、解決に持っていくというところを、両方見ながらやっていかないといけないと思えます。

確かに、不登校という現象を「良くない」と捉えるのがいいのかもしれないけれど、その子にとってみれば学校に行かないほうが幸せなこともある訳で、「何%という不登校の数字を、何%にしましょう」という議論になってはいけません。社会的な役割を持つ学校というのは、「おもしろいところで、行ったら楽しいところなんだ」ということを、子どもたちに分かってもらえるような、親のコミュニケーションとか、地域のコミュニケーションを考えるとそこに力点を置いた議論にしたいと思えます。

左巻委員

私は専門ではないのですが、自分が担任をした時に、原因が分からず不登校になった子がいて気になっている点があります。

それは、小学校から中学校になる時に大きなギャップがあり、不登校になる子が多いことについて、小学生は中学校に行く先輩にいじめられるというのを極度に恐れているようです。福井県でもそういう、「中学校にいくといじめられるぞ」というのはあるのでしょうか。

加藤企画幹

それよりも、小学生に中学校での生活を知っていただくということで、体験学習を取り入れ、自分の入るであろう中学校にあらかじめ行って、先輩たちがどういう活動をしているのかを見るということをやって、スムーズに中学校に入ってもらえるよう取り組んでいます。

また、小中連携として中学校の先生が小学校に出向いて、子どもたちの状況を聞いたり、小学校の時の問題点などいろいろなことを聞いたりして、スムーズに対応ができるよう取り組んでいます。

例えば、小さい小学校では少ない人数しか中学校に行きませんので、ぽつんぽつんとなってしまおうと友達もできません。そこで、学級編制の段階で元

の小学校の子どもを何人か同じクラスにして、入学した時から話ができる友達がいるようにし、さらに友達を広げてもらうようにしています。

そういう、いろんな配慮をするためにも、小中連携というのを以前に比べると濃密にやっていますが、それでも不登校の子どもが多いというのも事実です。

黒木委員

福井大学でも、「ライフパートナー事業」として学生が不登校の児童に対応したりしていますが、子どもが親に言えない、先生にも言えないという時に、ちょっとしたお兄さんだったら言えることもあると思うので、そういうことを考えないといけないと思います。

この前の神戸の自殺のように、何が起きているのか見えないんですね。可視化することができる仕掛けがあると良いのですが、学校の中でも外でも何が起きているのか見えないのです。

原因を見つけられれば、そこから解決できるのですが、見つけられないとおかしくなってしまうのです。見えないものを見えるようにする仕掛けをどうやって作っていくかを考える必要があると思います。

長谷委員

私が、美方高校に勤めていた時に30人くらいの退学者が出たのです。退学者の7割が不登校ですね。単位が取れなくて辞めていくのです。その時の学校教育目標を「退学ゼロ」にしたのです。10年かかって「退学ゼロ」になって3年間続くのですけれども、教員が全員一致団結して不登校をなくすことに取り組めば、見えないものが見えるようになると思うのです。

確かに、心身症に関わる不登校は何件か出ますけれど、あとの問題は教員が一致団結して取り組めば解決できるものです。カウンセリングマインドを身に付け、不登校を克服するステップ療法に皆でどう取り組むかというのを全校の教職員が共通理解すれば、ある程度、不登校を克服することはできると思います。

不登校をカウンセリングする優しさ、生徒一人ひとりをきちっと見ていく構えと、一方では、一生懸命やっている健常児をきたえる強い教育との両方を、一人の教員がやり抜かなければならないと思います。学校の中を見ていると、カウンセリングマインドに優れ不登校対策を行う先生と、わめいて叱ってがんがん引っ張る先生とが分かれているのが一番良くないのです。

いい学校というのは、一人の先生がその両面を持っている。それが大事だと思います。美方高校では、個々の教員がそういうふうになろうとしました。今でも若狭町では、小学生が「チャレンジウォーク」といって2泊3日で40キロ歩かせるというのをやっていますが、がんがんきたえる施策はそれで組んで、そして現実に不登校の見える子には対応をする。その両方をやっていくという資質を学校全体で作っていく。そういう雰囲気さえ漂えば不登校は防げると思います。

佐野委員

中学校で勉強についていけないと、高校には入れない。中卒では就職もほとんどないでしょう。そういう中卒で浪人している子どもをどうするかという問題があります。そういう子が集まってきて、バイクでもいじくったりして集団ができる。そういう子が自分の卒業した中学校に行って後輩を誘う。その時、不登校の子が巻込まれて困っているという話を聞いたことがあります。その場合、警察が指導し、強制的に集団を解散させるそうですが、そういうのが1つの問題としてあると思います。

子どもそうですが、親でも会社に行きたくない人も前よりは増えているの

ではないでしょうか。人事異動の時期ぐらいになると職場不適應とかいろいろあって、ずっと休んでしまう。復帰のためのプログラムを提起して繰り返して対応をする訳です。

私の知り合いの精神科医が、なぜ医者になったかという、自殺者を減らすためだと言っています。手に追えないほどカウンセリングをやっているが、一人でも多く自殺者を減らすためにやっているそうです。

社会全体の様々な現象の中で、不登校を1つの枠組みの中で捉え直してみることが重要ではないでしょうか。長谷先生のところのように成功する例もあるでしょうが、全体的な構造と連携して見ていかないといけない。他人的なことばかり言っていられないので、何か手を打って挑戦してみなければいけないと思います。

そういうふうには手を尽くすことによって、会社に出てきたくない人でも復帰に成功する人もいます。結果としてダメな場合もあるでしょうが、現場で最大限配慮して学校に来るように努力させることをしなければいけないと思います。

吉岡委員

いじめられて不登校になった場合は、その根元となったいじめ側の原因を絶たないと、学校に行くことがかえってマイナスになってしまう。そうすると、それは学校全体の問題になってくると思います。

いじめが起きていると、いじめは絶対に見えているはずだと思います。ちょっとした悪ふざけとか、たわいもない戯れとか、その悪ふざけの奥にもっと何かがあると思います。

車の中から登校の様子を見ていると、悪ふざけなのか、いじめなのかという光景を見つけることもある。一生懸命見れば、先生にも見えるんじゃないかという気がします。

広部委員

今の不登校の典型的なパターンと申しますのは、小学校は6年生まで学校に来て、中学校になりますと1ページの資料にもあるとおり、2倍近くに増える。中学校の1学期を終えて夏休みになって、2学期になると来なくなる。いろんなカウンセリングを行ってはいるが、それでも来ない。そのまま中学校を卒業し、ほとんどの子は学校や親の希望で、最近ですと定時制高校に通う。定時制高校では、バトミントンやったり運動やったりということでもにやっている。それから、卒業するとそのまま引きこもりになってしまう。

それが非常に大きな社会的な問題、損失になる訳ですね。ですから、ひとつのポイント、いじめなどの原因もあるでしょうが、小学校6年生から中学校へ移った途端になぜ不登校が2倍くらいになってしまうのか。ここに、ひとつ不登校を防ぐ手立て、ポイントが隠されているのではないかという思いを、私自身は持っております。

黒木委員

小学校ではクラス担任制だが、中学校に上がると教科担任制になってしまうと、非常に担任の先生との関係が薄れてしまうのではないかと。本当に学級担任の持つ役割がどういうふうなものであるべきかということ、もう少し考えたほうがいいかもしれない。

子どもたちにとって、小学校の間は先生と子どもの距離は近いんだけど、自分の経験でも、中学校に上がるとクラス担任との距離は、殴られたりすることもあって、非常に遠かったという感じが途端にしますよね。今までは、全ての授業をクラスの担任の先生に受け持ってもらっていて、ここでできなくても他の場面で甘えて取り返すということが出来ますよね。中学校に

入ると教科担任だから全部、科目ごとに一人ひとり別の先生だと。

そうすると、自分が精神的に頼りにしたい、甘えたいと思っている部分はまだ残っているのに、癒されないと言う点がありますよね。だから、ある意味で、至民中学校なんかやろうとしている「教科センター方式」みたいに、そこに自分が行けばいい、教科ごとの先生がホームにいて、そこに行けば先生との触れ合いがもてるとか。そういうふうな、今持っている中学校の構造自体を少し変えていく必要があるのではないかな。

小学校から中学校に上がる時は、今の子どもは昔と違って、それほどはっきり自立していないのではないかなと思う。そここのところが、ただ単に「中学校はこういうものですよ」と見せるだけではなくて、子どもが精神的に頼れる部分を少し残しながら移行していく。その仕掛けのひとつとして、「教科ホーム制」が考えられるのではないかな。このデータを見ると、そういう仕掛けが、中学校に上がった1年くらいは必要なのではないかなという感想を持ちます。

長谷委員

学習面でも、小学校6年と中学校3年というのは問題なんです。モデルがないから苦しい訳です。自分たちがトップになってしまうと、中学校1年、高校1年になったときにそのギャップが苦しくなる。社長から平社員に降格するようなものですから。また、下から学ばなければならんと。

だから、そここのところは人生の流れの中では切れている訳ではないので、小学6年生が中学1年生から学ぶことが終始できるような状態、中高連携なんかそうなんでしょう。中高一貫教育なんかは、中学3年生から高校生へ、中学4年、5年という感覚でいけるのではないかなと思うので、その辺が制度の良いところかと思うのですが。小学校6年生と中学校3年生には、学ぶべき上がいないというのが、1番大きいのではないかなと思います。

黒木委員

自分の経験からいうと、小学校の間はがっちり守られていたのが、中学校に行くとな、教科担任制になったということは、自分から見ると大人になったような感覚も逆にある。今度は専門の先生が教えてくれるようになって、ワクワク感、期待感なんかも感じる。小学校では出来が悪かったんだけど、中学校では頑張るといふ気持ちの切り替えができるという面もあると思うんだけど、今はまだ成長がそこまでいっていないような気もする。今、長谷先生がおっしゃったようなつながりという面と、甘えられる面を少し残すというのが、うまくできないかという気がする。

佐野委員

いじめが起こった場合、何かきっかけがあるんだと思う。顔を見ていきなりいじめるといふことはないと思うんですよ。何か、きっかけとなるトラブルがあったのではないかと。例えば、廊下を肩で風を切って歩いていたりして、肩がぶつかる、喧嘩する、何かシコリになって残る。一人ではあれなので仲間を作っていじめる。

その出発点は、マナーの問題でしょう。廊下を歩くのにマナーなく歩いていれば人とぶつかる。ちゃんとした廊下の歩き方から覚えさせる必要がある。

例えば、今、「江戸しぐさ」が見直されていますが、江戸時代では、人がすり替えする時には、お互い右肩を前に出して、胸を合わせるような格好ですれ違ふとか、傘を倒すときには外側に倒すとか、事細かにあるみたいですね。日常生活の中での人との関係について、必要なことを小さな時から教え込む。それは、当時江戸がいろんな人が集まってくる都市で、アメリカ合衆国みたいな状態で、いろんな言葉の訛りなどがある中で、みんなが社会生活を送っ

ていく上で、最低限のことはルールとして決まっていけないといけな。そういうのが、今かなり研究されていて、ベーシックなところで人間性の基礎を作っていて、江戸三百年をつくってきたのではないかという見方も一つある。

社会生活を営むために、お互いに尊重すべき部分を教えなといけなではないか。今、いろいろな階層から、しつけないような状態の者とかも混じって、いろいろな者が、学校に来ていると言う部分もある訳でしょう。だから、社会生活を営むために最低限お互いを尊重すべき部分を無意識のうちに身につけさせてしまう。そうすれば、意見ははっきり言うけれども、つまらない争いの種がなくなって、人間関係が楽しく展開していく、そういうシステムができるのではないかと。そういったところからいじめをなくしていく手法がないのかなと思う。

左巻委員

昔ベストセラーにもなった「完全自殺マニュアル」という本があって、問題になったりもしたが、その本の中にあつた言葉で、いろんなどころからバラバラに集まってきた子どもがいたら、「楽しいことと言えば、いじめと男女関係しかないよ」という話が載っている。だから、ただの烏合の衆で、学びとかでつながっていない、つまり、学校のクラスの中でうまく学校として組織されていない、バラバラのクラスではいじめなんかがあるのが当たり前であつて、ない方がおかしいと。

いじめだとか、学業に対する怠けとかをなくすとしたら、学校全体として、先生たちの資質とも関わるのだけれども、先生は、自分たちに学びをさせるというのを、楽しんでやってくれているんだなということが、子どもたちが感じられるようになれば、学びの集団として違ってくるのではないか。

だから、今、静岡県富士市の岳陽中学校で、佐藤学さんが「学びの共同体」という実践をやつただけだけれども、そこではチャイムが鳴っても中学生が廊下をうろうろしていると。それで、「何で教室に入らないんだ」と聞くと、「だって授業つまないんだもん」と。それが、そこに赴任した校長が見た姿だったんですが、それで何とかしなくちゃいけないということで、さっきの「同僚性の確立」というのを意識していくんです。先生方が子どもを見る目が、子どもたちがちゃんと学んでいるというのが自分の喜びにできるような教師集団ができてくると、廊下でうろうろしている子どもがいなくなるんですよ。

いろいろな授業を見て回ると、先生方が何とかしようとする「テンションが高い授業」というのがあるんですよ。身振りが大きくなって、声が大きくなって高くなる。そうではなくて、落ち着いたしっとりとした声で、静かに、だけどちゃんと学んでいるという授業がなされるようになる。不登校は、子どもが本当に心身的にうかがい知れない深いヤミの中にあつて、何ともしがたい部分というのもきつとあるんだと思うが、集団の側に原因があつて、自分はその集団にいることが嫌で、逃げたくなって不登校になっている。そっちだったら、解決はまだ可能だと思うんです。解決が不能な部分というのは残ると思いますが、解決できる部分もあるんだと。その解決が可能な部分というのは、学校っていうのは、家にただ一人にいるよりは、学校にいた方が楽しいんだと、学ぶということは自分を成長させられて楽しいんだと、そういうことが日々実感できる場所なのかどうかということが一番大切なのかなと思います。

それがきつと、不登校だとかいじめだとかを少なくする一番の処方箋になるという感じがするんですがね。

岩下委員

先ほど、長谷先生が実際にやられた例がありましたね。あれは、高校で少

し大人になっているという集団の例だと思うのですが、先生方の一致団結度といいますが、テクニカルな部分も学ぶのだけれども、真正面から見られるということを経済基本としてやられたんだと思うんですけども、それは中学校の先生でも同じだと思う。

学校のリーダーシップの問題なのか、仕組みの問題なのか、どちらかという生徒の指導方法というの大きいのかなと思うのですが、そういった環境の学校にいる子どもたちはうらやましいと思うので、集団としても、守られているとか、リスペクトできる先生などと、肌で感じさせられることが一番のパワーなのではないかと、お話を聞いていて思いました。

長谷委員

今、左巻先生がおっしゃるように、確かに最初は生徒指導部の問題として捉えて入っていったのですが、やはり、今言われるように学ぶ楽しさ、学ぶ意義の再構築というのが一番問題になってきて、最終的には進路指導、学力向上というところへ学校の目標が向かって行って、結果、進学率も上がったみたいに、不登校というとなんか生徒指導のことだけなんですけど、やはり学ぶことの意義と深くかかわるといふ現実がありますね。学びのある楽しい学校というのをどう作っていくかということが問題だと思います。

それから、不登校ということも先ほど言われましたが、保健室にいる女の子もやはり何人かいました。やはり教室の中が荒れていて、そんな中にいるのが嫌だと。そういう生徒も確かにいることはいました。そういう子は教室が治まってくると帰ってくる。

最初に、部活動の話なども出ていましたが、やることの楽しさ、学ぶことの楽しさ、学ぶことの再構築といえますか、大学に行くためだけに学ぶのではなくて、人格を高めるために学ぶんだということがみんなに分かってくるような学校を作るといふことが、キーワードになっていくのかと思っています。

祖田座長

いろいろ今、お話を聞いた中では、どうやってそうした子どもたちを感知するシステムを作るか。一方で、そういったことに負けないようたくましく子どもを鍛え上げていくという面もあるでしょう。

小学校と中学校の違いが急激に訪れないように、今でも連携を取っておられたり、いろいろと工夫されているようですが、さらに連携を取っていかれることが必要ではないか。

いろいろなことが絡んでいて簡単ではないかと思いますが。やはり、少しでも原因を早く突き止めて、実際に起こってしまった場合には少しでも早く感知するシステムを構築することが必要かなと思いました。

いくつかポイントはご議論いただいて、時間も経ちましたが、全体を通して何かあればお願いします。

黒木委員

福井県の不登校人数というのは、知恵を絞ってすでにいろいろ対策を行った結果この数字になっているのか、こういう実態だからこれから何かしていこうという状態なのか、どちらですか。

加藤企画幹

福井県の不登校対策支援事業は平成15年度から行っているのだから、対策をとった結果の数字です。

長谷委員

「人間関係構築プログラム開発事業」というのは、効果はあったのでしょうか。

加藤企画幹 出現率は、平成9年度は0.24でしたが、平成14年度では0.33になっている。出現率は、全国的にどんどん高くなっている状態であり、本県でもこの間、波打ちながら上がってきている。その後は、少し下がったところで横ばい傾向となっている。
対策がなかった場合どうなっていたかは分からないが、本県の動向は申し上げたとおりである。

広部委員 ただ、今回の調査で出現率が少し上がったため、危機意識を持ってご議論いただいているところである。

祖田座長 3回にわたりまして、ご議論をいただきました。これまでいろいろなご議論をいただいてきた訳ですが、今回は、効果が挙がるような具体的な提言ができますように、よろしく願いいたします。
知事、何かご意見などがあればいかがでしょうか。

西川知事 今日は、途中からの出席となってしまいまして申し訳ありませんでした。いずれにしても、「ていねいな教育」、「きたえる教育」ということを、どのように具現化するかということかなと、私は個人的に思っております。
特に、学校の先生がなすべきこと。なすためには、学校の先生が自らをどういうふうにする、何を勉強する、研修する、他に地域では何をやる、家庭では何をやるということをクリアにさせていただくと分かりやすいのかなというのが、ひとつ大きな流れとしてあります。
それから、疑問点として、小学校と中学校では、先生はどのように採用されているのか。

加藤企画幹 小学校教諭と中学校教諭では、試験は共通だが、第一希望、第二希望、第三希望を書くことになっている。

西川知事 小学校と中学校では、子どもの状態も違うし、社会環境も違うし、先生の内構えや状況に合わせた対応なども相当違うのではないかと。その状況に合わせた対応が要るのかなと思います。
以前、校長先生に講演をお願いするのに、小学校の校長先生の体験談と中学校の校長先生の体験談についての代表的な本を読んだことがあります。はじめとか、学校が荒れた頃の本だったと思いますが、小学校の先生は、「非常に楽しくて素晴らしい、こんないい仕事はない」という話だったが、中学校の先生の話は、非常に暗いことが書いてあって「こんなに苦しいことはない」という書きぶりだった。
今はどうなっているのか知りませんが、小・中の対応には差があるのかなと。高校生になってしまえば、社会性もあるし、物事の判断力もある程度ついているのかなというような感じもしております。感想であります。

○閉会

教育政策課長 貴重なご意見をありがとうございました。
今後のスケジュールでございますが、これまで3回のご議論をいただきまして、「教員の指導力向上策」、「理科・数学教育の充実」の2つのテーマに基づき、第一次提言のとりまとめをしていくということでございます。
第4回目の会議は、10月15日に予定しております。その際に、第一次

の会議の提言のまとめをしていくということで、事務局の方でこれまでのとりまとめ作業をさせていただき、それを基にご議論いただく形にしていきたいと思っております。

また、整理する中で、事務局から資料のやりとり等、委員の方をお願いすることがあるかと思っておりますので、何卒ご協力をお願いいたします。

なお、本日の議事録につきましては、ホームページで公開させていただきますので、ご了承の程、よろしくをお願いいたします。

以上をもちまして、第3回会議を閉会させていただきます。本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

以 上